



ICT 海外ボランティア会会報

No. 22 (旧、NTTOBSV 会会報)

2011年1月21日(金)

Home page : <http://sv.nttob.org/>
e-mail : sv@info.nttob.org

目次

- ◆巻頭言 NTT国際協力関係者方々のご縁
(財)日本国際協力センター理事長
松岡 和久氏
- ◆新春寄稿 アウトオブアフリカ後日譚
田上インターナショナル代表
田上 智 氏
- ◆拡大幹事会開催
事務局
- ◆本会入会者リレー寄稿 私の履歴書
NTT東日本ITイノベーション部担当課長
今川 眞治氏
- ◆ICTサポート体制確立に向けて
派遣者支援部長 山下 満男氏
- ◆国際協力に関するお薦めの図書
事務局長 加藤 隆 氏

巻頭言

NTT国際協力関係者方々のご縁

(財)日本国際協力センター(JICE) 理事長
松岡 和久

ICT 海外ボランティア会会員の皆様、明けましておめでとうございます。本年における皆様のご健勝とご多幸を衷心よりお祈りもうしあげます。私は日本国際協力センターの松岡と申します。どうぞ、よろしく願い申し上げます。

昨年9月、高校の東京同窓会総会において加藤隆事務局長とお近づきになる機会を得、皆様のよう素晴らしい活動をなさっている国際協力の仲間（失礼をお許し下さい）がいらっしやるのが判明し、勝手ながら、ここにご挨拶を申し上げる次第でございます。

私は1970年 JICA の前進である海外技術協力事業団 (OTCA、1974年 JICA に改組) に入団、2007年末に JICA を退団し、以後現在に至っております。OTCA 入団直後の10年間は、大学で土木工学を学んだこともあり、開発調査部（現在の経済基盤部）に配属され、交通インフラの F/S 等の調査業務に従事しておりました。当時の同部員は、8割が関係省庁等からの技術系出向者で占められおり、電気通信分野は NTT と KDD からの出向者が担当しておりました。この間、NTT から出向されていた三浦健氏、速水昭三氏、片桐徳一氏に大変お世話になりました。分野が異なっていたため、直接技術的なご指導を仰ぐことはありませんでしたが、当時連日行われていた、アフターファイブの課内会議？では、役人との付き合い方、海外出張時での注意事項、酒の飲み方等「社会人としての心得」について多くの薫陶を賜りました。その時のご指導のお蔭で今日の自分があると、身にしみて感じております。その後、NTT 退職後 JICA の国際協力専門員となられた鈴木靖雄氏とは無償資金協力関連業務で、山崎尚男氏とはインドネシアでご一緒させていただき、両氏からは技術者魂というものを学ばせていただきました。

JICA 人生最後の5年間（2003年～2007年）はアフリカ・インフラ・教育・保健医療・緊急援助隊そしてボランティアを担当しておりました。その間、シニアボランティアの皆様とは派遣前研修の開講ないしは閉講の際ご挨拶する機会があったのではないかと存じます。あるいは、待遇見直し（改悪とご批判された方も多くいらっしやり、直接ご説明させていただいたこともありました。）や、JOCV との合同研修を開始した頃の担当であったといえ、ご記憶にある方もいらっしやるのではないかと思います。JOCV との最初の合同研修は駒ヶ根で行われましたが、シニアの方からの JOCV に対する生活規律や技術知識・経験での様々なご指導が非常に有効であることが実証されたことは言うまでもありません。

しかし、一番驚いたことはシニアの方々の旺盛な食欲で、初日はご飯が不足し、翌日から普段の1.5倍の量に増やしたことや、自動販売機の牛乳が直ぐに売り切れになる等、面白い逸話を沢山覚えております。

また、この期間はアフリカへのボランティア派遣を大幅に増やした時期でもあり、ガボン・カメルーン・ナミビア・への新規派遣とルワンダへの再派遣が始まり、これらの国々には在外事務所が開設されました。ルワンダの事務所開きには貴会の特別顧問でいらっしやる宮村大使にご臨席を賜り、温かいご祝辞を頂戴いたしました。さらには、カガメ大統領にも拝謁するという光栄にも浴し、この場をお借りいたしまして、改めて当時のご厚情に感謝申し上げます。

JICA 退団後、2008年より JICE に勤務し、来日する JICA 研修員・留学生（無償・有償）・高校生等交流のお世話や JICA 派遣センターにおいてボランティアや専門家の皆様の派遣業務を担当し、皆様の派遣から帰国までの様々な手続き業務を実施させていただいております。皆様の現地での活動が円滑に実施されることを願いつつ、業務に邁進いたしておりますが、不行き届きな点があった場合には、この場をお借りいたしまして、深くお詫び申し上げたいと存じます。今回の「仕分け」の結果、2012年より、JICA 研修員・JICA 派遣センター関係

業務が JICA に内製化されることが決定し、今後は JICA 以外の研修員・留学生（無償・有償）・高校生等の受け入業務を中心に、JICA から自立した形で国際協力に貢献して参りたいと考えております。因みに、ボランティア関連業務も仕分けを受け、予算的に厳しい状況にはありますが、事業自体を否定されたわけではありませんので、ご安心頂きたいと存じます。

これまで申し上げましたように、この 40 年間に亘る私の国際協力人生は NTT の三浦先輩（大学）との出会いから始まり、加藤先輩（高校）との出会いで終わったと言っても過言ではなく、NTT との不思議なご縁を感じざるを得ません。その意味でこうして皆様とお近づきになれることを心より嬉しく思っております。

さて、短くもあり、長くもあったこれまでの JICA 人生の中で、最も強く感じることは、「日本・日本人の知の凄さ・素晴らしさ」ということであり、今後ともライフワークとしてこの「日本・日本人の知」を世界に伝える業務に専念して参りたいと考えております。従いまして、今回の ICT 海外ボランティア会会員の皆様とお近づきになれたことを機会に、今年は、「シニア人材の知を如何にして（JICA 以外の財源活用）、世界に伝えるか」ということを課題として取り組んで参りたいと考えておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、今年の ICT 海外ボランティア会の益々の発展をご祈念申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

新春特別寄稿

アウトオブアフリカ後日譚

田上インターナショナル代表

田上 智

世界 48 カ国を旅したが、アフリカが最も強く印象に残っている。1985 年から 3 年間ガーナ郵便電気通信公社の経営再建に身を削ったが、このたびはその話ではなくて、ケニヤで 17 年間過ごし、「アウトオブアフリカ」という傑作で世に出たデンマークの女流作家カレン・ブリクセンが主人公。



筆者近影

ガーナ滞在中、東アフリカのケニヤにアフリカの専門家と東アフリカの青年協力隊員が NTT の人事部長の現状調査で集まったことがあった。そうはいつでも西アフリカからは自分ひとりで、ガーナの首都アクラから事故の多さから“空飛ぶ棺桶”と呼ばれたエチオピア航空で行った。座席のとなりはアメリカ人の写真家。あとで判ったのだが、著名な人物で「ナイロビのスラムをぶらぶらする」と妙な事を言っていた。

ケニアの首都ナイロビの高層建築は、どうみてもアフリカのイメージではない。それに海拔八百メートルのナイロビは涼しく、「アフリカの軽井沢」といわれ高温多湿のガーナから来ると天国と地獄の感があった。NTT の人事部長に「ここはどうみてもアフリカではなく、

ヨーロッパですよ」と言ってしまったが、あとで少し言い過ぎたかなと後悔したことを憶えている。よくアフリカに行ったよという人に限って「ケニヤとエジプト南アにね」というのだが、そこはアフリカでは無い。たしかにアフリカ大陸に属するが、単なる“観光地”である。高温多湿、断水や停電、マラリアに悩まされる西アフリカこそが“真のアフリカ”だと自分はいまだに信じている。

人事部長の面接や全員の会議が終わって帰るまでに1日残されていたので、カレン・ブリクセンが過ごした家そのまま記念館になっていたので見学した。

彼女は1914年、スウェーデン貴族である夫の移住地ナイロビに来たわけだが、その頃は、船と港町モンバサからは鉄道を利用した。モンバサから来た協力隊員は、「低地のモンバサは死にそうに暑くて、ナイロビの仲間は涼しくてうらやましい」と言っていた。しかし、“モンバサ”とはなんといい心地よいアフリカらしい響きだろう。

カレンはコーヒー園を夫と経営するも失敗。結婚生活も破綻するのだが、その間、夫の浮気や夫から移された梅毒に悩まされ、1931年デンマークに帰国した。

コーヒー園に働く現地人には親切にしたため、非常に慕われた。記念館には現地のキクユ族に与えた薬を作るための臼が残されていた。当時の写真もあり「黒髪の若妻」の風情があったが、後に「アウトオブアフリカ」で映画化されアメリカ人の「金髪の女優」メルル・ストリーブが演じていたのだが、本人と雰囲気は全く違うので大いに落胆した。

実話であり小説でもある「アウトオブアフリカ」は薄幸の若妻の単調なアフリカの日々を写すだけでは無い。デニス・ハットンというイギリス人でサファリの案内人とのラブロマンスを描いている。もともと軍人で作家であった父親の影響もあって幼い頃から文章に親しみ文芸誌に小品を寄稿していたりしたのだが、アフリカという異質な風土の中で一挙に文才が開いた。その開花のきっかけが本人言っているのだが、このいかにもアフリカの風景に似合うこの野生的なデニス・ハットンだったのである。私の感想をあえて言えば、数多くの作品を残してはいるが、後にも先にも傑作はこの「アウトオブアフリカ」だけである。あのケニヤの草原の野生動物や伶俐な空気、太陽や風、草原に沈むまことに大きな夕日は決してヨーロッパには無い“異質な大地・アフリカ”を如実に表現している。他の作品はヨーロッパのつまらない日常を描いていて印象に残るものは無い駄作である。

ヘミングウェイの「キリマンジャロの雪」を池澤夏樹はかつてフィクション性の全く無い代物と酷評していたが、私は全く別の印象を持っていて、ケニヤの草原と類似しているであろうタンザニアの風景をまことにたくみにキャッチしていてアフリカの匂いすら感ずる作品だ。

アウトオブアフリカとは文字通り「アフリカを出でて」そしてアフリカには戻らないという意味が隠されているが、カレンは思い出深いアフリカには決して戻らなかった。アフリカには「アフリカの水を飲んだものはアフリカに帰る」という諺があり、これにあえて抵抗して題名を「アウトオブアフリカ」としたのではないだろうか。

さてアフリカから帰国した私は、カレン・ブリクセンのことなど全く忘れた。わずかに拙著「ガーナの熱い風」のなかで数行触れただけだった。それから10年後、NTTを飛び出し、ニュースステーションやスリランカテレコムを経て人材派遣会社に勤務していた。これからは介護事業だという創業社長の掛け声のもとデンマークの「電動車椅子」の会社との業

務提携を結び、製品をデンマークから輸入することとなったのだが、自分がその責任者となり、デンマークへ出張した。

交渉が休日をはさむため、取引先が気を遣って「どこか観光したいのなら案内しても良い。例えば人魚姫とかアンデルセンの生家とか」との事だったが、「それには及ばないが、カレン・ブリクセンの家のあったルングステッツまでのアクセスを教えてください」と言ったら、相手がびっくりしていた。日本に来た外国人に「樋口一葉の生家はどこか？」と聞かれたにほぼ等しいからだ。欧米人ならいざしらず、まさか日本人が何故カレン・ブリクセンを知っているのかという口ぶりだ。デンマークではその頃紙幣（20デンマーククローネ）の肖像になっているくらいの人気作家なのだが、そういう意味でも薄幸の人生を送った樋口一葉に酷似している。

ルングステッツの海辺の家は広壮なつくりで、ケニヤで精製した当時のコーヒー等も展示してあった。そこで初めてカレン・ブリクセンがもともとは文学少女であり、アフリカに渡る前から作家としての素地があったのが、アフリカでの強烈な異文化体験や恋人デニス・ハットンとの出会いが「アウトオブアフリカ」を生み出したということが判った。

ケニヤとデンマーク、カレン・ブリクセンとアフリカというそれぞれの点がここで線となって結ばれたわけだ。さて、わがガーナとデンマークはこの線で結ばれないのだろうか？

この「電動車椅子」事業の担当者は「自分もガーナで働いていたんだ。もともと歴史的にもデンマークとガーナは関係があるんだ。あのクリスチャンボルグ城というのをあなたは覚えていないか？独裁者ローリングスがいたあの総司令部のことだよ」。そういえばかつてデンマークも一時、ガーナを占領したことがあった。拙著「ガーナの熱い風」にこういうくだりがある。郵便と電話の料金値上げに苦労したが、「大蔵省をクリアし、申請案は最後の関門キャッスル（城）へ上申された。その昔ヨーロッパ諸国は、この地でも血で血を洗う戦いを繰り広げていたが、デンマーク軍はアクラの海岸沿いに城を築いた。その名をクリスチャンボルグ城と呼んだ。そこに今、独裁者ローリングスが居住し総司令部として使っている。そして皆からキャッスルと呼ばれ、最も恐れられているのである」ここで私は何回もの兵士のボデーチェックを受けて入ったのである。今でも克明に待合室の華麗な調度品や絵画があったのを憶えている。そして部屋に行く途中で観た余りにも美しかったギニヤ湾の青い海。

私個人もカレン・ブリクセンのようにあれからアフリカには戻っていない。正直に言うと経団連ミッションで南アフリカに4日ほど滞在した。しかしもとより南アフリカは“観光地”であってアフリカではない。だから、まさしくアウトオブアフリカである。そして縁あって彼女の故郷のルングステッツも訪れた。

アフリカといっても確かに東と西は異なる。しかし、最もアフリカの雰囲気を知りたかったら是非「アウトオブアフリカ」を一読していただきたい。或いは同名の映画でもよろしい。

（了）

拡大幹事会開催

事務局

去る1月16日、信濃町駅ビル内レストラン「ジョン万次郎」で昼食をとりながら拡大幹事会を開催しました。石井、加藤、山下、村上、それに大分から駆けつけた山崎の各氏、それにメキシコから帰国したばかりの横田さん、及びBHNプロジェクトでパキスタンから帰国した佐藤（徹）も加わりました。

本「ICT海外ボランティア会」の持続的な発展を忌憚ない意見を交えながら2時間に及ぶ懇談を行いました。

意見を交わした主な事項は次の通りです。

1. 本会入会者の意向に基づき、参画できるプロジェクトが発生した場合、斡旋する仕組みをつくりたい。これは不足している海外要員の供給や人材育成にも寄与する。
2. 山下派遣者支援部長が中心となって進めている派遣中のボランティア支援の周知に関し、関係機関のご支援をいただきダイナミックに推進する。
3. 現在、山崎広報部長が進めているリニューアルしたHPは来たる2月1日よりスタートする。その場合現在のURLでも閲覧可能とする。（詳しい案内は山崎部長により次号の会報で紹介。）



本会入会者リレー寄稿 第7回

「私の履歴書」

2010年11月20日

NTT東日本ITイノベーション部担当課長

今川 眞治

はじめに

はじめまして、今川と申します。何故か私がリレー寄稿に投稿する事になってしまいました。これまでのリレー寄稿に投稿されている方々（先輩諸氏）はJOCV、専門家、SVの経験者であられ、私は残念ながら、と言うよりは不徳のいたす所です、経験していません。

そんな私が、加藤様より「今川さんの経験を踏まえて読者諸氏に一層海外に目を向ける（開く）きっかけになるような内容、、、」というご依頼を受け、さてどうしたものかと悩み、リレー寄稿が中断する事を恐れながらも、小職の多少の海外業務経験を履歴書ベースで紹介するしかないという事で、書かせて頂きます。

きっかけ：

国際協力というか、国際に興味を持ったのは何故か？何時ごろか？の問いかけが有るかと思うのですが、小職の場合、学生時代はこれといった取り柄も無く、平々凡々と生活していました。卒業も近づき、さあ、何処かに就職しなければならないと考えた次期に、丁度 JOCV の案内(吊り広告?) を見ました。

何故か、その瞬間これだと想い、募集案内を見ると、専門能力が何かしら必要な事が判り、手に職を付けねば応募もままならない事がわかりました。さあ、どうしよう、そこでラジオ少年、手先はそれなりに器用？当時比較的簡単な電々公社の入社、入社すれば色々覚えられる、、、ということで、電々公社に飛び込んでしまいました。当時、不純？な動機で電々公社に入社した訳ですが、まさか38年も勤めるとは思いもよらなかったのが正直な所です。

それから：

入社して、機械工事課、局内保全課で主に屋内通信設備の運用保守を経験し、その後工事事務所で NW 関連の計画・設計・建設・工事・監督・検査等々の建設関連業務を NW のデジタル化の大波の下で多忙な経験をしました。ふと気がつくと、入社後 10 数年が経っており、JOCV に応募する機会も見逃し、当初の思いは何処かに忘れ去られた状況でした。そう言いながらも、何故か国際への思いは持続しており、希望を出していました。 そんな折、運よく？ NTT インターナショナルへ出向ということで、やっとスタートラインに立てた次第です。お蔭様で、その後 NTT インターナショナルでは様々な経験をさせてもらいました。

エジプト(湾岸戦争で現地行きストップ、それ以降アフリカには縁がありません)を初めに、インドネシア、フィリピン(第5回寄稿の下井田様とご一緒させて頂き、約3年間赴任)、タイ、マレーシア、インド、スリランカ(スリランカテレコムに対するデューデリジェンス参加、また爆弾テロで NTT 社員が被害にあった事件の丁度1週間前に運よく帰国、第6回寄稿の今井様とはすれ違いでした)、ベトナム(BCC プロジェクト)等で従事して来ました(第4回寄稿の山崎様とは NTT インターナショナルからのお友達、第3回寄稿の山下様は当時からご指導受けています)。

そして、NTT インターナショナルが分社化のあおりで解散、以降 NTT 東国際室に運よく滑り込み、その後ベトナム(約3年 NTT ベトナム社へ出向)、トルコ、カンボジア等また海外研修生の受け入れ等々で国際協力業務に携わる事が出来ました。電々公社入社以来 38 年近くになりますが、気がつけば海外の仕事が 20 年余りになり、自分でも大袈裟に言えば波乱万丈、楽しく？やって来られたと思います。

海外業務の多くはビジネスベースですが、あえて国際協力の範疇となるとフィリピン、トルコの経験が該当するかと思います。

なかでもフィリピンの PJ 経験は思い出に残る海外経験でした。OECF 資金によるルソン島の電話網構築という ODAPJ で、ピナツボ噴火で埋もれた地域も含め約90局所に渡る NW 構築、加入電話の構築という電々マンには最高の PJ でした。今では考えられない電話普及の PJ であり、携帯電話も無く、一度現場に出ると PJ-Office に連絡も付かない僻地廻りが多く、他のメンバーの気持ちはわかりませんが、私は充実した仕事が出来たと自負しています。

また、トルコの PJ は世界銀行資金によるイスタンブール地域の防災通信 NW 構築基本設計という PJ であり、日本 (NTT) の防災通信に関する知見、技術が活用する事が出来、地震災

害国同士の絆？が生まれたような気がしました。

現況：

小職、現在 NTT 東日本の国際室に在職しております。 NTT 東日本の国際室（正確に言うと、IT イノベーション部国際室）はオール NTT で捕らえると、国際協力に関わる業務について分社化以降も継承し担って来ました。

残念ながら国際協力と言う担当部署名が現在は有りませんが、国際室として国際協力に関わる対応、JICA 業務等も一部請け負っておりますので、微力ながらお手伝いできる事も有るかと思えます。

また、電気通信分野の ODA 等で案件、協力要請が衰退している中で、ICT と広い枠で見ると協力、参加できる分野が多いと感じます。今年度秋募集で久しぶりに電気通信分野での JOCV 募集が有り、SV の募集も出てきており、社員の皆様に啓蒙活動しているところです。

そして これから：

私のこれまでの海外業務の場合、JOCV、専門家、SV の方々の皆様の多くが、一人でご苦労されているのと違い、多くは他の NTT メンバー、また多くのローカルスタッフと一緒に有り、厳しいとは言いながら、恵まれた環境下で働きました。 また、私はこれまでに先輩諸氏に助けられ、また多くの仲間（私の片思いかもしれませんが）に恵まれてきました。 そんな私に比べて、国際協力に携わっている多くの皆様は、孤軍奮闘でご苦労されている方も多いと思います。 今後、私は協力、ボランティアということで頑張られている皆様に微力ながら、私で出来る事があればという思いで、SV をはじめボランティアでご活躍される方々のお役に少しでも立てればと思います。また仲間作りに貢献できればと思います。

おわりに

上記、長々と拙い自分史を書き連ねましたが、会社努めも来年（2011年、編集部注）3月卒業になり、晴れて多少自由？の身になれそうですので、これまでの経験を少しでも生かして、国際協力分野で動けたらと想う日々です。 但し、これまでの経験を生かせる分野があれば良いのですが、今後は分野に捕らわれずに、何でもやってきた、何でもやるしかないという、これまでのポリシーを維持して、行動出来たら想っています。 こんな身勝手な小生ですが、これからもアドバイス、ご支援を願えれば幸いです。

追記：これまでの寄稿者の皆様方は素晴らしい写真を付けて寄稿されていますが、小職適当な写真が見あたりません。 参考までに、海外業務で遭遇した面白い写真を載せて頂きます。



停電で信号機がストップ（ハノイ、ベトナム）



雪のイスタンブール（トルコ）

ICTサポート体制について

JOCV/SV サポート体制の確立に向けて

派遣者支援部長
山下 満男

JOCV/SV サポート体制は次のように考えています

1. サポートの目的

- (1) 海外で活動中の JOCV/SV がスムーズに活動出来るように技術的・管理的な側面からサポートし、活動内容の高度化/効率化を図る。
- (2) 派遣国が抱える電子政府、教育、医療、環境、防災分野等における ICT 用した問題解決に JOCV/SV の活動を通じて取り組んでいく。
- (3) JOCV/SV だけでは解決出来ない課題については、関係部署協力のもと、問題解決に取り組む

2. サポート対象

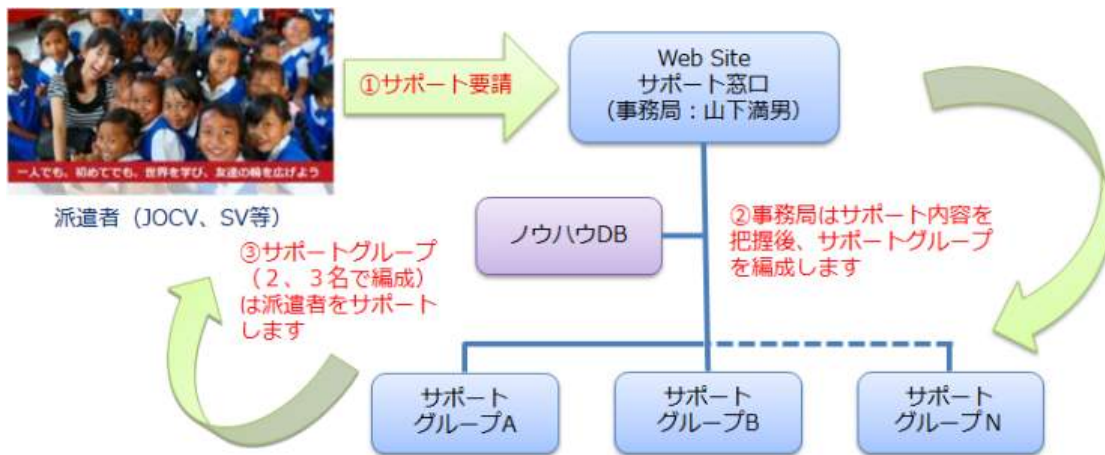
- (1) ICT 分野で活動している JOCV/SV 隊員
- (2) 電子政府、教育、医療、環境、防災分野等で、ICT を活用した問題解決に取り組んでいる JOCV/SV 隊員
- (3) サポート対象者から見返りを求める事や、義務を課する事は全くありません。本人から了解が得られれば、会報への投稿をお願いします。

3. サポート体制

- (1) 最初の全てのサポート要請は「サポート窓口（事務局）」で受け付けます。
- (2) 事務局はサポート内容を把握後、サポート部隊（サポート要員 2、3 名）を編成し、アサインします。

- (3) アサインされたサポート部隊（2、3名で編成）は、直接サポート要請者と連絡をとり、原則として派遣者が帰国するまでサポートします。
- (4) サポート部隊はサポート概要を定期的/随時に、事務局に報告し、事務局はサポート概要をDBに保管・管理します。
- (5) サポート部隊だけでは解決出来ない課題については、事務局が中心となり、関係部署協力のもと、問題解決に取り組みます。

サポート体制を図で表すと、次のようになります。



国際協力に関するお薦めの図書

事務局長
加藤 隆

「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る（第1集）」2010年11月

シニアボランティア経験を活かす会編

本著は将に“シニアの Young-at-Heart の献身の記録、生き甲斐の記録”であり、開発途上国（33カ国）で活躍したシニア44名（延53名）が、帰国報告会で発表した内容を収録したものである。内容は具体的で生々しい活動の実態のほかに、派遣された各国の事情も紹介されている。文章だけでなく写真も豊富でカラフルで読み易い。

これは貴重な記録の価値のほかに、SVに関心のある方への指針としても有用である。

（120 ページ、2500 円）

平和と国際情報通信―「隔ての壁」の克服

加納貞彦等編著

本著は NTT 研究所 OB で現在早稲田大学教授加納貞彦氏等が編著したのもで、“平和をどのように捉え、平和をもたらすためにどのような活動をしたらよいか”との課題を考えるために、早稲田大学オープン教育センターで7年にわたりさまざまな講師の体験談を基に、学生と討論を重ねてきた項目のうち、9氏による講演内容を収録したものである。

その1人に「青年海外協力隊の一員として」と題して矢田部治子氏の新疆ウイグル自治区で日本語を教えた体験が掲載されている。いずれの講義からも心を揺さぶる響きが聞こえる。

(早稲田大学出版社 236 ページ 1200 円+税)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集部 加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 今年も一同張り切って参ります。よろしく願いいたします。

巻頭言は(財)日本国際協力センター理事長 松岡和久氏よりいただきました。長年に亘りわが国の国際協力に尽力なされた経験から滲みでた示唆に富んだ内容かと思えます。NTTの国際協力の先駆者の方々とのご厚誼の様子も触れられ、私もお世話になった方々なので懐かしくも感じました。今後の一層のご活躍をお祈りするとともに、当会に対してご指導もお願いいたします。

- ・ リレー寄稿は、NTT東日本現職の今川眞治氏より、数々の海外業務ご経験を披露いただきました。NTTの技術協力の歴史の1ページを再認識した思いです、氏の豊富で多方面にわたるご経験は貴重で、現在も当会がご支援をいただいておりますが、引き続きよろしく願いいたします。

- ・ 山下派遣者支援部長が中心となって進めている派遣者への支援体制は始動しました。関係者や私の経験からも、多くの要請が期待されます。既にSVとしてトンガで活躍中の鈴木弘道氏からの要請で、e-Governmentに関する支援が始まっております。JOCV, SVに限らず、支援の必要のある方が居られましたら、是非ご一報ください。(以上 加藤)

・ 田上インターナショナルの田上さんから私にとってはアウトサイダーであるアフリカの秘話を寄稿していただきました。私は機会あって、氏の著書「ガーナの熱い風」「さらばトミートロージャン」そして最新の著「豊かさの風景」も氏から寄贈いただき読みました。今後も機会あれば寄稿お願いしたいと考えているのですが。(村上)

(以上)

総編集長 : ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長 : ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣

発行 : ICT 海外ボランティア会

メール : sv@info.nttob.org